

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	保育所等訪問支援Cocon		
○保護者評価実施期間	R8年 8月 3日		～ R8年 8月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	11 (回答者数)	10
○従業者評価実施期間	R8年 8月 3日		～ R8年 8月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	3 (回答者数)	3
○訪問先施設評価実施期間	R8年 8月 3日		～ R8年 8月 31日
○訪問先施設評価有効回答数	(対象数)	9 (回答数)	8
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 9月 12日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	こどもの様子を実際の生活場面で丁寧に観察し、行動の背景や発達特性を踏まえた専門的な支援につなげていること	園・学校等での集団生活の様子を観察し、行動だけを捉えるのではなく、その前後の状況、環境、課題の難しさ、感覚面や理解面、他者との関係等を整理している。こどもの表情や行動、選択等から本人の思いや負担感も捉え、声掛けや環境設定、課題提示の方法など具体的な支援につなげている。	訪問時の観察・アセスメントの視点を職員間でさらに共有し、記録や振り返りを蓄積することで、支援の根拠や変化がより分かりやすく示せるよう充実を図る。
2	訪問先施設との連携を大切にし、実際の集団生活の中で取り入れやすい支援方法を一緒に考えていること	訪問先の理念や支援方法、日々の活動を尊重しながら支援を行っている。訪問先職員が困っている場面や対応に迷う場面を聞き取り、実際の様子を一緒に確認しながら、声掛け、環境設定、待ち時間の過ごし方等、その場で実践しやすい方法を提案している。訪問後にも振り返りや情報共有を行っている。	訪問先職員との振り返りや助言内容をより整理して記録し、その後のこどもの変化や支援方法の有効性を継続的に確認することで、訪問先と協働した支援をさらに深めていく。
3	保護者・訪問先・事業所がこどもの姿や支援の方向性を共有し、一貫した支援につなげていること	訪問後は報告書、連絡、電話等を通して、園・学校での様子や成長、課題、実施した支援内容を保護者へ分かりやすく伝えていく。また、担当者会議やモニタリング、支援会議等を活用し、保護者・訪問先・関係機関・事業所で支援の方向性を共有している。	保護者や訪問先からの意向を定期的に確認し、得られた意見や評価を支援計画や事業所の業務改善へより具体的に反映できる仕組みを整えていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	訪問支援の内容や効果を、継続的かつ客観的に評価・記録する仕組みについて、さらに充実が必要であること	訪問時の児童の様子や支援内容、訪問先への助言等は記録・共有しているが、支援前後の変化や助言後の経過を一定の視点で継続的に確認し、支援の効果として整理する仕組みは十分に確立できていない。	訪問時の観察項目や振り返りの視点を整理し、前回の助言内容、その後の変化、今回の評価、次回確認する点まで一連の流れで記録できるようにする。支援の積み重ねや効果が保護者・訪問先にも分かりやすく伝わる記録体制を整えていく。
2	訪問先施設との情報共有や振り返りの機会について、施設の状況に応じながら、より安定して確保していく必要があること	保育・教育現場では日々の業務が優先されるため、訪問当日に十分な振り返り時間を確保することが難しい場合がある。また、訪問先によって連携方法や情報共有の機会に差が生じやすい。	訪問時の短時間で共有できる要点を整理するとともに、報告書、電話、面談等も活用し、訪問先の負担にならない方法で継続的に情報共有できる体制を整える。必要に応じて次回訪問時に前回の助言後の様子を確認し、支援方法を一緒に見直していく。
3	保育所等訪問支援の役割や支援内容について、保護者や地域の関係機関へさらに分かりやすく周知していく必要があること	保育所等訪問支援は、児童発達支援等と比べて支援の目的や具体的な内容が伝わりにくく、保護者や関係機関に十分に理解されていない場合がある。事業所としても、支援内容や利用による効果を分かりやすく発信する機会が限られている。	支援の目的、訪問時に確認する内容、訪問先への助言、保護者への報告までの流れを分かりやすく整理し、説明資料等を活用して周知を図る。相談支援事業所や園・学校等との連携を深め、必要な児童・家庭へ支援がつながりやすい体制づくりを進める。